

中野区教育委員会会議録 平成26年第4回臨時会

○開会日 平成26年7月31日(木)

○場 所 中野区教育委員会室

○開 会 午後 6時30分

○閉 会 午後 9時03分

○出席委員

中野区教育委員会委員長	小 林 福太郎
中野区教育委員会委員	渡 邊 仁
中野区教育委員会委員	高 木 明 郎
中野区教育委員会委員	大 島 やよい
中野区教育委員会教育長	田 辺 裕 子

○出席した関係職員

教育委員会事務局次長	奈 良 浩 二
副参事(子ども教育経営担当)	辻 本 将 紀
副参事(学校教育担当)	伊 東 知 秀
指導室長	川 島 隆 宏

○担当書記

子ども教育経営分野	片 岡 和 則
子ども教育経営分野	高 橋 綾 菜

○会議録署名委員

委員長	小 林 福太郎
教育長	高 木 明 郎

○傍聴者数 0人

○議事日程

[協議事項]

- (1) 平成27年度使用教科用図書の採択について（指導室長）

中野区 教育委員会  
第4回臨時会  
(平成26年7月31日)

午後6時30分開会

小林委員長

ただいまから教育委員会第4回臨時会を開会いたします。

本日の委員の出席状況は、全員出席です。

本日の会議録署名委員は、高木委員にお願いいたします。

本日の議事日程は、お手元に配付の議事日程表のとおりです。

ここでお諮りをいたします。本日の協議事項、平成27年度使用教科用図書の採択については、採択過程における審議の公正を確保するため、中野区立学校教科用図書の採択に関する規則第10条第1項に基づき、会議を非公開としたいと思いますが、ご異議ございませんか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

小林委員長

ご異議ございませんので、非公開とすることに決定いたしました。

(以下、非公開)

(平成26年第24回定例会における会議録の公開決定に基づき、以下非公開部分を公開)

<協議事項>

小林委員長

それでは前回に引き続き、平成27年度使用教科用図書の採択について協議を行います。協議の進行につきましては、前回と同様の方法により行いたいと思いますので、よろしくお願いをいたします。

それでは、算数についての協議を行いたいと思います。各委員から順にご意見を伺いたいと思います。

まず高木委員からお願いをいたします。

高木委員

私が算数の教科書で一番重視しましたのが、中野区で行っている少人数クラスということでございます。これがまた高学年だと一部習熟度が入ってきますので、スモールステップというのも重要だと思うのですが、習熟度別が導入されているということを見ると、ある程度進め方についてはグループでできるのではないのかと。そこに対応できる教科書というのが一つと。あとは現行の学習指導要領で、スパイラル、行って戻って学び残しを

残さない、これは非常に重要だと思います。ここにきちっと対応している教科書は何なのかなという観点で見せていただきました。といっても教科書、膨大ですし、少人数クラス等々やっていくと、追加で問題等の配付もあるということも見ていくと、そうしますとやはり全会社、検定を通っていますので、特段ここは選べないというのはないのかなと思っています。

その中でも、見ていくと少し気になったのは、1年生のところで大日本図書の数の例示のところ、いろいろなものを出していくのですが、そのところが小じやれたチョコレートですとか、クッキーとかというのが、ちょっと1年生にはわかりにくいのかなという気がするのと、あと非常に余白が多くて、教科書に書き込ませる形にしているのですけれども、これよしあしだと思います。特に少人数クラス別を考えていったときには、基礎基本がしっかり載っていて、なおかつ発展的な学習も押さえているというところを重視していきたいなと思っています。それを見ていきますと、現行で使用している東京書籍が既習事項の確認、スパイラルのところ、ほかのところと比べていいのかなという気がします。また全般的な読みやすさもすぐれているのではないのかなと思っています。

これ以外でも、学校図書、教育出版もいいところがあって、甲乙つけがたいなと思っていますが、どれか一つということだと、現行の東京書籍かなというところが私の意見でございます。

小林委員長

それでは次に大島委員、お願いいたします。

大島委員

私も幾つかのポイントを絞って見ていったのですけれども、まず1年生の初め、一番初めのところですね。数が出てくるというところで、これは数の概念というのをしっかり理解させるという大事なステップだと思うのですが、そこでは具体的なものから、だんだん抽象的な数の概念へと進んでいくのですけれども、具体物、いろいろなところ、例えばいろいろな動物とか小鳥とか花とかを出している会社もあるのですけれども、それから次にブロックとか、おはじきとか、そういうものであらわして、あとだんだんそういう具体物がなくなって、数字のカードになったり、式になったりなんかしていくわけですけれども。

その初めのところで、各者見ていきますと、例えば学校図書は黄色だけのブロックとか四角が使ってある。それから大日本図書も黄色だけのブロックが使ってある。教育出版は黄色のブロックと絵と、それからおはじきというのが使ってある。新興出版社啓林館は白

の中にオレンジ色の丸が描いてあるというブロック風の絵を使っている。それから日本文教出版もオレンジ色のブロック、オレンジ色の四角とおはじきを使っている。東京書籍は白と黄色が2層になったブロックの写真を使っていて、これは中野区の各小学校では白と黄色の2層になったブロックを使って、実際に児童たちが持っていて、それを使うのですね。その持っているものと同じ白と黄色のブロックの写真を使っているということで、やっぱり中野の小学校としては、この白と黄色のブロックが出てくるというのが、やっぱり一番具体物としては適切だろうというふうに思います。

あと4年のところで、4年の上巻のほうなのですけれども、3桁の数字を1桁の数字で割るというので、例えば256割る4とか、各者ちょっと違うのですけれど、216割る6とか、要するに100の位が、割る整数で割れないという、その3桁割る1桁の計算の説明のところで、教育出版は216割る6という計算のやり方のところで、200の百の位で商が立たないわけなのですが、何で立たないのかというような説明がない。百の位で立たないときには十の位に崩していくと、210というふうに崩して行って、それで6で割れるかというふうにやっていくわけなのですけれども、崩していくという場面の説明がない。これはちょっと児童にはわかりにくいのではないかな。

例えば学校図書は、100の、やっぱり同じようなことなのですけれども、そういうとき百の束と、十の束の絵がありまして、百の束を十の束にして考えようというようなところ、それからいわゆる、よく割る式が254と書いて、左横に3を書く、割る印を書くという、その式は、その図はみんなどこでも出てくるのですけれども、そこで2割る3、百の位は割れないねというような説明があると。

そういう意味では、大日本図書も3割る5は立たない、できないねとか、商が百の位に立たないというのは書いてあるのですが、十の位に崩すという説明がない。

新興出版社啓林館は、やっぱり百の位が割れないという説明がありまして、百の束を十の束にするという、束の図と説明が書いてある。

それから日本文教出版も、やっぱり割れないのですけれども、2割る3で商が立たないねということは一応書いてあるのですけれども、十の位に崩すというようなところの説明があまりなくて、すぐにやり方のまとめに入ってしまうというようなことがあって、東京書籍が一番丁寧でして、256割る4というのですけれども、4で2が割れないという説明があって、それから百の束が二つでは4人に分けられないと。そこで束を十の位に分けるという図が何ステップにもわたって書いてありまして、すごく具体的にわかりやすく説明

しているので、考える過程がよくわかるというふうに思います。

それから6年生のところなのですけれども、分数割る分数というのがありまして、例えば5分の2割る4分の3という、そういうふうに出てくるのではなくて、塀をペンキで塗るといふときに、5分の2デシリットルで塀の4分の3が塗れたらどうかと、そんなような具体例で各者とも出てくるのですけれども、要するにそういう分数割る分数という計算についてなのですが、いきなり分数割る分数をやらせるのではなくて、分数割る整数という、例えば5分の3割る2とか、3とか、まず整数で割らせるということが出てくるのが東京書籍と学校図書ですね。大日本図書も、いきなり分数割る分数というので出てきます。それですぐに計算を書かせるというようなことになっております。

日本文教出版は結構丁寧にアドバイスがたくさん書いてあるのですが、日本文教出版の場合はちょっとアドバイスが多過ぎて、丁寧過ぎるといいますか、子どもが考える妨げになるかもしれないかなと思ったりいたします。

東京書籍の場合は、今、言ったように分数割る整数から始めて、分数割る分数というのに進んでいまして、手だても比較的多く示されていて、説明が丁寧になっております。

学校図書は、整数で割る内容から始まって分数割る分数に進むのですけれども、手だてが少な目で言葉の式もないので、先生によるやはり補足の説明が必要だろうなというふうに思われました。

そんなところで、全体に見ていきますと、大日本図書は今、高木委員のお話にもあったかと思うのですけれども、非常に書くスペースが大きいのですね。ノートがわりになるほどに書くスペースが多いのですけれども、やっぱり少なくとも中野の小学校ではちゃんと別にノートを用意しまして、そこに先生の指示で書かせるようにして授業が進んでいきますので、教科書にあまりたくさん書くスペースがあっても、これは不要かなと思われたり、新興出版社啓林館のものもなかなかいいなと思うところもたくさんあります。さっきの分数割る分数にしても、手だても結構多く書いてありますし、それとあと結構算数にまつわる興味深いエピソードといえますか、そういうものも書いてあったりして、なかなか魅力がある教科書だというふうには思われるのですけれども、やっぱり一番、比べていきますと東京書籍のものがともかく学習の流れとか、やり方というのがわかるようになっていて、特に各教科書の初めのほうに学習の流れ、やり方というのが丁寧に説明してありますし、中のほうでも説明が丁寧でわかりやすいと。それからマイノートの書き方の指導も出てきて、ノートの書き方についての指導もあると。やっぱり一番読んでいて何か楽しい感

じがあったのですね、東京書籍。私のように算数がすごく苦手な者にとっては、やっぱりちょっと算数というと苦手意識とか、取っつきにくいというイメージがあるのですが、そういう意味で何となく見ている楽しい雰囲気があると。

それから言い忘れましたけれども、分数の計算に入る前に、小数の割り算を振り返ろうというようなのがついていまして、そういう振り返りということにも配慮していると。覚えているかなというようなことでの、振り返りのページが結構随所にあるのですね。そういう振り返りへの配慮がしてあるというところがいいかなと。

あとは取り上げる題材で、例えばグラフについての勉強のところ、グラフの題材に何か好きなスポーツのアンケートの結果とかを使ったりとか、あとは並べ方のところの説明の例として、遊園地の乗り物を使って、並べ方の学習なのですけれども、ジェットコースターとか、コーヒーカップとか、そういう乗り物を使ったりして、非常に楽しい雰囲気を演出しているというように感じられました。

あとスパイラルというか、振り返りということについては、各者ともに大体目次のところで示しておりまして、目次に前の学年で習ったこととかというのは大体表示してありますので、各者とも配慮はしているなと思いました。

以上です。

小林委員長

それでは渡邊委員、お願いします。

渡邊委員

数学の内容を見るに当たって、まず分冊であるか1冊であるかという、その点をちょっと見てみました。それで1年生が1冊、5、6年生が1冊というのは、何かいいのかなというふうに。1年生ぐらいのときに、あまり分けたりとかするものもどうなのかなと、いろいろとったりしました。

それで問題集がいかに多くあるかというような観点でいうと、日本文教出版が問題集の取り扱いが非常に多いのですね。ただ、日本文教出版だけちょっとサイズが大きくて使いにくいのかなという印象がありました。

次に、内容で見ていくと、ブロックを使っているかというところで、1年生のところと6年生をちょっと重点的に比較の対照にしてみまして、1年生のところのわかりやすいかなとか、そういう点でみると、教育出版と東京書籍がいいのではないかなというイメージがありました。

その中で、教育出版だと、6年生の数学への扉ということで、小中連携の取り扱いなんかが意外にいいのかなと。それと「算数ワールド」というような拡張の手引きみたいなものが出ていて、そういうのも少し興味深いなというふうに感じました。

ただ、東京書籍も、それに似たような算数の話とか、算数の目で見てみようとか、東日本にかかわるデータなんかも出ていて、それとか「考えよう、伝えよう」、及び「マイノートをつくろう」というページがあるのですけれども非常に特徴的で、非常におもしろい。

振り返りコーナーというところもありますし、その点、東京書籍はよくできているなど。ただ、教育出版の「はてな」とか「なるほど」とか4コマ漫画で考えさせる手法とかも意外におもしろい。東京書籍、教育出版、このあたりであれば、どちらも特徴的であって、今まで使っていることも考えると東京書籍がいいかなという気がしますけれども、確かに教育出版の教科書もいいのではないかと思います。

小林委員長

ありがとうございます。それでは田辺教育長、お願いいたします。

田辺教育長

委員の方が皆、とても詳細に説明をしてくださったので、私も同感するところがたくさんありますし、簡単に重複しないように私の意見を述べさせていただきます。

中野区の学力調査の結果を見ますと、中野区の子どもたちは計算はある程度できるのですけれども、思考力を伴う問題が弱いというような傾向がありますので、ここを何とかフォローできるような、そういう学び方ができる教科書がいいなというふうに思って、そういう観点で教科書を見てきました。

私は2年生の後半で掛け算が初めて出てくるのですけれども、掛け算は算数の基礎だと思っておりますので、そこを中心に見てみました。

結論から言いますと、各委員おっしゃるように、教科書の大きさとか、分冊か1冊かというような使い勝手もありますけれども、内容的には各者それぞれ遜色ないものというふうには思うのですけれども、やはり掛け算九九の導入の仕方が丁寧で、なおかつ掛け算に興味を持って指導ができたり、掛け算の応用がいろいろ広がっていくということで見ますと、東京書籍の教科書がちょっと抜いているかなというような気がしました。

またノート指導なども丁寧にわかりやすい解説がされていますので、あと文章とか絵もソフトで親しみやすいという点もありましたので、私としては東京書籍がいいのではない

かと思えます。

小林委員長

最後に私の意見を申し上げます。今回の学習指導要領そのものとしては、算数的活動の楽しさというか、そういったことはかなり強調されていて、都教委の資料などを見ても算数的活動の箇所ということで、先ほど問題の数では渡邊委員ご指摘のように日本文教出版が抜き出ているのですが、バランスのよさではやっぱり東京書籍というような状況になっていると思います。

各委員のお話のとおりで、どれもそれぞれのよさがあると思いますので、私はこの採択の冒頭にも申し上げましたように、今回の小改訂ということを考えると、継続性という点からも、東京書籍が一番いいのではないかというふうに思っています。特に理数系に関しては継続性というのは、私は重要視したいなというふうに思っておりますので、そういう視点からも東京書籍に絞って考えてみたところでございます。

それでは、ほかに各委員の方からご発言はございますでしょうか。

ないようでしたら、算数につきましては各委員の方々ご意見のとおり、東京書籍ということによろしいでしょうか。

それでは、ここでお諮りをいたします。ただいまの協議の結果、算数については東京書籍を採択候補とすることをご異議ございませんか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

小林委員長

ご異議ございませんので、算数については東京書籍を採択候補とすることに決定いたしました。

それでは教科書を入れ替えますので休憩します。

午後6時55分休憩

午後6時57分再開

小林委員長

それでは、再開いたします。

次に、理科についての協議を行います。各委員から順にご意見を伺いたいと思います。

まず大島委員、お願いいたします。

大島委員

各者とも、初めに「学び方」というのが出てきまして、学び方についての解説が出てく

るのは共通しております。例えば「問題」があって、「観察」があって、「考えよう」、「まとめ」というような、大体そんな流れなのですけれども、若干各者ともちょっと言葉が違ったりはするのですが、初めに「見つけよう」とか、「調べよう」、「まとめよう」というような言葉で、学び方についての提示があります。ですから今、理科については主体的に子どもたちが問題を見つけて、問題意識を持って、それについてどういうふうに調べたらいいかとか、そういうのをまず考えて、それに基づいて観察だとか実験だとかをやって、そこから得られる結果について考えてみよう、そしてそれをまとめて表現しよう、こんなようなことを重視してやらせようとしているということがわかるかなと思います。

それでちょっといろいろなところを見てみますと、例えば4年の電池のところを見たのですが、単元名としては「電気の働き」というふうになっているところが多いのですが、大日本図書だけは「電池の働き」というふうにしております。内容的には大体同じようなことで、乾電池を使って直列とか並列とかという、そういうつなぎ方の違いでどうなるか。

電池のところのテーマというのは二つあって、つなぎ方を変えることで、モーターの回る向きが何によって変わるのか、それからモーターの速さ、もっと速くするにはどういうふうにしたらいいのかと。向きと速さということを各教科書とも扱っているわけですが、その扱い方はいろいろ工夫しているのだと思うのですけれども。

大日本図書は、アンペアのもとになったアンペールという学者や、乾電池を発明した屋井先生という方の紹介などもあって、非常に興味を引くような話が載っています。

それからあと大日本図書でいうと、「何々だろうか」という設問があって、答えが「わかったこと」ということで書いてあるわけですが、この何とかだろうかという設問と、結果のわかったこと、これが小さくてちょっと目立たないというのが、教科書としては、作り方としてはちょっとどうかなというのと、直列、並列のつなぎの図の扱いが小さいというふうに思いました。

学校図書は、乾電池については非常に詳しく載っていて、「回路図」という言葉もほかではあまり見ませんでしたけれども、出てくるというようなことなのです。「まとめ」という欄があるので、これが目立たないというふうに思いました。

新興出版社啓林館も、乾電池とモーターの回る向き、速さというテーマで、こういうテーマを掲げている、はっきりしたこういう書き方、「向き」と、それから「速度」というふうに書いてあるのは非常に特徴的で、課題がはっきりわかるなというふうに思いました。

それから教育出版は、「プロペラカーをつくろう」というところから入っていきまして、電池の働きを紹介しているというのが特徴的な手法かなと。乾電池の向きを変えると、モーターの回る向きはどうなるだろうかというような設問があって、それから実験が出てくる。次に乾電池のつなぎ方によって、速さはどうなるだろうかという問題があって、また実験と、こんなつくりになっております。

東京書籍も、大体同じようなことなのですけれども、回る向きは何によって変わるのだろうかとか、モーターをもっと速く回すのにはどうしたらよいだろうかというような問題があって、それから次に実験がそれぞれ出てくるという構成なのですけれども、「まとめ」というところで大事なことが非常に大きく書いてあると。結果が目立つところがいかなと。直列と並列の電池のつなぎの図も非常に東京書籍は大きく出ていました。

それから5年生の「天気」のところを見てみますと、天気については雲と天気というようなことと、それから台風というのと、二つのことがあって、それが各者とも別の場所に、続いてはいないというつくりにはなっているのですけれども、大日本図書も初めに「雲と天気」というのが見開きで7ページぐらいありまして、それから別の、ちょっと後のところで「台風」が4ページぐらいあるというようなことです。

大日本図書は5年生の初めの時期に、雲や天気についてやるということになっています。教育出版も、初めの時期に雲の観察とかをやるようになっているのですが、東京書籍も5年生の初めに天気をやると。春の天気の説明から始まっているのですけれども、雲を観察しようというようなことになっているのですが、大日本図書もそうですね、時期的に見ますと。

学校図書と新興出版社啓林館、学校図書は9単元あるうちの5単元目ですから、かなり遅い時期で、台風のころに台風の話から始まっているということがあって、やっぱり継続的に天気を観察するというような学習を進めるという点からすると、4月から始めたほうがいいのではないかなというふうにちょっと時期が気になります。

新興出版社啓林館は、やっぱり3単元終わった後に、ちゃんとした単元としてではなくて、何かトピックス的に台風の話が出てくるのですね。それからまたその後に5単元目として「雲と天気」というちゃんとした単元で出てくるということで、これもやっぱり天気を学習する時期が遅いのではないかというところがちょっと気になりました。

あとは6年生の「燃焼」というところを見てみますと、大日本図書は結構気体を発見する歴史について科学者の紹介なんかのページもありまして、これも非常に興味を引かれる

話題でおもしろいとは思ったのですけれども、ただ、図がちょっと小さいのと、紙面が全体にちょっと詰め込んでいるような感じがいたしました。

学校図書の場合は、何かページの上半分に設問と実験のやり方が書いてあるのですけれども、ローソクが燃えた後、瓶の中の空気がどうなったかなというような設問と実験は書いてあるのですけれども、どうなったかという結果が下のほうに書いてあるというようなことで、何か実験をやる前から結果が出てしまっているというような、そういう作りがちょっと疑問かなと。

教育出版については、そういう「燃焼」の単元でもそうなのですけれども、非常にノートの使用方の指導が詳しくて、使い方、どんなことを書くかという、問題とか予想とか理由とか、いろいろなことを書きなさいという中身についても指導があるという点が非常に特徴的かなと。

新興出版社啓林館、非常に情報量が多くて、ほかでは扱っていないような情報、例えばローソクとお線香の燃え方というようなことはほかの教科書では扱っていないのですけれども、そういうことまで扱っているし、金属が燃えることとか、炭のこととかそういうことまで入っていて情報量が多いのですけれども、理科好きの子には大変興味深くておもしろいかなと思うのですけれども、ちょっと一般の子には難しいかなというふうな感じです。

あとは学校図書は「チャレンジ実験」、「チャレンジ観察」という言葉が出てくるのですけれども、別にチャレンジといっても発展的内容ではなくて、普通にやることについてそういう名称をつけているので、ちょっと紛らわしいかなというふうに思いました。

あと新興出版社啓林館は「わくわく理科プラス」という別冊があるのですが、この薄い別冊になっているのが、ちょっと教師には扱いにくい、授業に取り入れるのにどうかなという疑問があります。

それで各者、どれもみんなもちろん必要なことはちゃんと書いていますし、そんなに内容は違いませんし、どれで悪いということもないのですが、東京書籍は全体的に紙面がゆったりしていて、余白がある感じで見やすいと。活字がすごく大きい。それとこれもつかむとか、実験しようとか、まとめとか、そういうタイトルがすごく大きくわかりやすく出ているので、それでそういうようなタイトルで教科書の書き方が統一されているので、わかりやすいということ。單元ごとに「確かめよう」という振り返り問題があることとか、巻末にノートの書き方の指導があることとか、それともう一つ特徴的なのは、4年以上についてなののですけれども、目次のところで四つの領域に分けて目次を分類して表示している

ということで、「ものの性質」、「ものの働き」、「生命」、「地球」と、こういう四つの分野に分けているというところが何か理科の分野としての系統性というのをはっきり示していていいのかなというふうに思いましたが、東京書籍は、あまり親切過ぎるかなと。問題、実験、結果、まとめというようなことをはっきり教科書で必ずこういうふうを書いて、そういうテーマでまとめてあるというのは、何かあまり授業が自分で考えるという、あるいは先生が授業をするというところ、先生の創意工夫みたいなものが働く余地が少なく、ちょっとあまりに親切過ぎるのかなというおそれもちょっとあるのですけれども、ゆったりしていて、何か見やすいというところもあるのですが、ほかの教科書もそれぞれいいところがありますので、ほかの委員の方のご意見も伺ってみたいと思っております。

以上です。

小林委員長

それでは渡邊委員、お願いいたします。

渡邊委員

理科は重点的に、5年生ぐらいを見ていて、5年生の単元って意外におもしろくて、興味をそそる、理科の教科書というのは意外に大人が興味を持って見れるようなところがあって。実生活にまつわる天気の話、それと生命の誕生ということの部分が書かれてあります。自分自身は専門分野が医学なので、生命の誕生を見ましたけれども、どこまで詳しく本当に書いていいのか、自分がどこまで、意外に今度専門家になるとどこまでが教えるべきことで、どこまでが教えるべきことではないのかということも難しくて。ただ、系統的に書かれている本というふうに見ますと、東京書籍と教育出版がよく書かれているなど。天気を見ていてもそんなふうに来ます。川の流れとか、災害とか。

大日本図書はちょっと内容がほかの教科書に比べると少ない気がします。ちょっとその中にコンパクトにまとめすぎているのかなというふうなイメージは持ちました。

東京書籍の特徴は非常にわかりやすいですね。書き方が「問題」、「観察」という線で引いてあって、非常に誘導的なので、ちょっと教育者というところから考えても、生徒も教育者もこういうふうにごここまで丁寧にやっていると、とてもやりやすいだろうけれども、ちょっと疑問は感じます。その点、教育出版は非常に「問題」、「実験」だとか、「わかったこと」とかで非常にわかりやすく書いていて、こういうような流れの教科書とか授業の進めやすさだろうなというところに、実際に授業を行っていない私から見ても、わかりやすい、進めやすいのではないかなというふうに感じました。

東京書籍と教育出版が問題解決、実験、結果という形で、文章の書き方とか、そういった理科の考え方を示していくには、やはりうまくできているのかなというふうに思っております。

また教育出版は、巻頭に1年間の学習の内容が見開きで出ているというのも、実際に学習していく上には結構特徴的でよろしいかなと。

東京書籍だと、基礎的な能力に力を置いているというのはやはり感じ取れます。

問題解決の過程が繰り返されているので、理科ってほかの部分と若干違って、考えて、いろいろな事実を調査してという、意外に理科系でない人はやりにくいようなところをすごく丁寧に書いてあるので、東京書籍が少しぱっとやりやすいし、見やすいし、内容もいいのではないかなと感じました。

ただ、それが本当に教育者にとって、そこまで懇切丁寧であることがいいのかなというのは、若干思うのですけれども。ただ、個人学習をしていく上にでもやりやすい教科書だなと思って、やはり東京書籍か教育出版がいいのではなかろうかということで私の意見とさせていただきますと思います。

小林委員長

では、高木委員、お願いします。

高木委員

やはり理科の場合は、物事を観察して、そこから結論を導いて検証するという流れが一番重要なのかなと。理科に限らず、社会人になってくると物事について見込みを立てて、やってみて、結果を確認して、振り返るといのは、全般的に必要な能力なので、このところがしっかりと実験ということを踏まえて、流れているのかなというところにポイントを持って見ました。

そうしますと新興出版社啓林館のアプローチが、「結果を記録しよう」、「考察しよう」ということで、何か割とシンプルで、もうちょっと何かスモールステップというか、分割したほうがいいのかなという気がします。

あと大島委員も指摘されていましたが、「理科プラス」という小ワークが見ていてすごくおもしろいのですけれども、なくなってしまうのかと。3年生ぐらいだとどこかへ行ってしまふかなと。ちょっと使いづらいような気がします。

学校図書は、アプローチはいいのですけれども、ほかの委員からも指摘がありましたが、

実験の計画と結果が見開きで出てしまっているところがあるので、ちょっとやっぱりネタバレのところがあるのかなという気がしました。

教育出版、東京書籍、大日本図書、私はちょっとここで3者、あまり甲乙つけがたいかなど。仮説を立てたり、あるいは実験の観察の計画を立てる、実験してみる、結果を出す、まとめる、振り返るといった流れが3者は割としっかりできていたのかなと思います。

例えば東京書籍ですと、巻末に実験器具の使い方なんかが入っていますので、理科の場合3年生以上ですけれども、割と若い先生がやる場合もあるので、実験器具の使い方がまとまっているというのは、教えやすいのかなと思いました。

同様に教育出版でも巻末にミニ図鑑があったり、大日本図書でも写真やイラストでわかりやすく入っているので、そんなに3者遜色はないのかなと思います。なので私はこの3者のどれかと、ただ、個人的な意見で言うと、東京書籍の構成は私はフォントの種類が多くて、大きさも何種も使っているんで、ちょっと目が疲れるのですね。ただ、私も50歳なので、それもあと思うので、子どもはこれ、わかりやすいのかもしれないですが、年配の先生はちょっとつらいかなと思います。

小林委員長

それでは田辺教育長、お願いいたします。

田辺教育長

皆様のご意見はもともと私も思いますが、理科は小学校の1年生、2年生は生活科で、3年生から初めて理科という教科に入ってきます。また理数教育を中野区としてはぜひ推進したいということで進めていますので、理科好きの子どもを多く育成していきたいと思っていますので、導入が割とスムーズに入っていって、理科に興味を持ってもらえるような、そういう教科書はどうかなという観点で見ましたので、主に3年生の教科書の最初の導入部分を見比べてみました。

中野って東京のど真ん中で、人口密度が日本一を争うぐらいの過密都市の中で、自然を見つけるというのはなかなか難しいことなのですけれども、自然が一番どこにあるかというと、私は学校の中が中野区内では一番自然に恵まれているということだと思いますので、一番中野の子どもたちが親しみを持って、春は春、秋は秋という、そういう自然を見出せるのを一番スムーズにあらわしているのはどれかなと思って見てみますと、東京書籍の教科書が、3年生の4ページで「学校の中でいろいろ見てみよう」というような仕立てになっていまして、イラストと写真とで4ページから6ページぐらいまで、学校の中の様子で導

入をしているのがスムーズに入っていけるかなと思いました。

それ以外のところは結構田園風景であったりということで悪くはないのですけれども、身近なところで感じられるのではないか。それから理科という、自然の観察なのですけれど、観察カードを書いて、必要なことを調べて、みんなで話し合っただけで進めていこうということで取り組んでいます。それはどこの教科書も同じなのですけれども、東京書籍の教科書が観察カードがとても大きくて見やすいので、これはいいなというふうに思いました。例えば3年生の16ページとか、同じく20ページの観察カードが大きくて読みやすいというようなことがありました。

中野の子どもたちにとって導入がしやすいのは東京書籍ではないかなとは思いましたが、ほかの教科書も全然遜色はないと思ったところです。

以上です。

小林委員長

それでは最後に私の意見を申し上げます。理科はそれぞれそれなりの特徴を持った編集をしているのかなというふうに思いました。ただ、細かく見ていくと共通性が当然あるわけで、それぞれの会社のカラーというか、その部分についてはもう既に各委員の方からもかなり出ました。

私が着眼したのは、一つは理科ですので実験を重視するという点で、今、教育長の実験の観察としての重要性ということと、もう一つは私が着眼したのは教育出版の裏の表紙に全部「安全の手引」が全て載っているのです。私はこれは危機管理上もかなり重要な視点で、他の教科書にも安全指導については出ているのですが、ここが一番インパクトが強いというか、特に若い先生が多い中で、理科の実験の事故というのはこれから区としても大きな課題、危機管理という視点で考えていく必要がある。そういう中で、安全をして、強調している点ではこの教育出版がすぐれているのかなというふうに、この部分では思いました。

それから学力向上の点なのですけれども、いわゆる本来の理科好きにするものと、それから今、ちまたに言われる学力向上とが果たして合致するかという悩ましい部分もあります。私はちょっと見方が一方的かもしれませんが、東京書籍も非常にすぐれているのですけれども、どちらかというところ、今日的というか、理科好きというよりも本当に学力という点で、先ほど大島委員からも指摘があったように一つの流れができている。特に結果とか考えとかまとめとかですね。これは非常にいいわけなのですが、果たしてこういう形で理科

好きになっていくのだろうか、思考をパターン化した理科の学習の仕方です。ですから私は本質的に理科好きにしていく、今、理科離れということが言われていますが、そうした点で教科書を考えたときに、特にノート指導に非常に力を入れているのがやっぱり教育出版なのですね。ですから私はほかの会社も全部それぞれいい部分があるのですけれども、そういうところに着眼しました。

それから大日本図書に関しては、幾つかご指摘がありましたように写真が小さいとか、総ページ数が少ないというふうに私は感じました。

東京書籍もいいなと思うところなのですが、今の安全性の観点や継続性とか、その他本来の理科好きの学力向上というところを考えたときには、教育出版がいいのかなという思いを持ちました。

以上でございます。

それでは各委員からのご発言をいただきたいと思います。

渡邊委員

指導室長にちょっとお伺いしたいのですけれども、先ほど指摘したのですが、東京書籍は最初から最後まで流れができたような形で、すごく授業の展開その他等もやりやすいのですけれども、果たして授業をしていく上で、現場としては本当にやりやすいものなのでしょうか。それとも型にはめられてしまうと、やりにくいものなのでしょうか。

指導室長

これは本当にその人の授業スタイルにもよりますので、私一個人の意見としてお聞きをいただきたいのですけれども、私は理科の教科というのはやっぱり「わくわく、どきどき」するような教科であるべきだというふうに思うのですね。

例えば教科書の中で、当然問題があって、それで実験や観察があって、最終的に結論を出して、そこから言えることを導き出していくのですけれども、答えがわからないところのおもしろさということもあると思います。

渡邊委員

私も先ほど理科的なものの考え方というか、問題、実験、結果という形では、確かに東京書籍と教育出版を推してはいるのですけれども、東京書籍で若干気になるのはあまりにも型にはまった授業になりやすいのかなという感じはあります。

それで理科の興味とかというと、吹き出しの部分、授業で習う部分ではなくて、それを応用した部分の一言一言みたいなものがちょこっと載っているほうがおもしろいのか

なというふうには思っています。

本当に、そういう点では教育出版のほうが、ミニ図鑑なんかも入っていたりとか、興味的な部分があると思うのです。

小林委員長

今のところ各委員のご意見で、ある程度のところで東京書籍、教育出版、このあたりに絞られてきているわけですが、さらにこれを絞り込む意味でのご意見をいただければありがたいと思いますが、いかがでしょうか。

大島委員

東京書籍の教科書はどの単元もみんな「問題」、それから「観察」、「まとめ」というふうに全部大きくタイトルが出ていまして、左のほうに緑の線がつながっていまして、この線に沿って皆「問題」、「観察」、「実験」、「まとめ」とか、全部同じような形で、判で押したというとおかしいが、そういう形でまとめられているので、わかりやすいとも言えるのですけれども、やっぱり先生方は非常にちょっとやりにくいのではないかなど、もともとちょっと気にはなっていたところなのですね。なのでこれもちょっとよしあしかなんか思っているところがございます。

小林委員長

ほかの委員の方々はいかがですか。

田辺教育長

私、委員の方々がかなり詳細に意見を言っていたので、先ほどは省略して私の意見を述べさせていただいたのですけれども、ちょっとつけ加えさせていただきますと、教育出版はかなり生活科からのつながりというのを大事にしているなという気がして、理科に対する導入が丁寧に学ぶようになっていくなというふうに思うところもあります。

例えば3年生の20ページで、「生活科で学んだこと」ということで、振り返りをしながら理科につなげていくというような、そういう取り組みもされていますし、それから先ほど私が観察カードの書き方などでカードが大きくて見やすいというお話をさせていただいたのですけれども、教育出版のほうもその3年生の9ページにカードの書き方ということで、丁寧な解説があり、カードもかなり見やすい形になっています。

また、単元の終わりに「確かめ」ということで、まとめをしているのですけれども、そこに例えば参考で「わかった」というところで17ページを振り返って、確認をして確かめをしましょうとか、観察カードの書き方が振り返りにあったり、11ページに戻ったら虫眼

鏡の使い方があるよということで、それが全学年にわたってそういう振り返りができて、スパイラルというのですか、そういう形で丁寧にされているということですので、私としては東京書籍か教育出版かどちらかということで甲乙つけがたいというふうに思います。

大島委員

先ほどちょっと言い忘れたのですけれども、今、教育長からお話が出た振り返りという点では、これはいいなともともとと思っていたところは、教育出版では4年生以上で目次の横のところに、4年なら3年、5年なら4年で、前の学年で学んだことという欄がありまして、これはほかの教科書もみんな前の学年で学んだことの単元のタイトルとかは出ている教科書が多いのですけれども、教育出版はタイトルが出ているだけではなくて、その内容の概要というのでしょうか、ごく簡単にまとめたものが絵とか図なんかも入って、ここにあらわされているというのはすごく学習上便利といいますか、よくわかっていいのではないかなと、ここは利点かなというふうに思いました。

小林委員長

ほかにいかがですか。

渡邊委員

先ほどいろいろの話題の中に入っていた、授業の展開のしやすさとか、そういった観点からと、もう一つ理科好きな子どもたちになろうという、理科に興味を持とうという、そういう観点を見ますと、教育出版の最後のページ、科学者たちのメッセージみたいなものとか、先ほども少し言ったのですけれども、「ミニ図鑑」で、非常にこれ楽しい図鑑で、意外に興味を引いているような内容のものを巻末につけていると。

それと授業の展開の方法というのはいろいろな方法があるので、果たして筋道を全部示されたほうがいいのかどうなのかというのは、やはり幾つかの考え方があると思いますけれども、そういう意味では教育出版のほうが考えながら授業を展開できるということはあるかなと。

それともう1点、理科を災害に結びつけた、そういった教育に関しては、先ほども教育出版、委員長が言われたように「安全の手引」が後ろに出ているように、洪水だとか台風だとか、そういったものを扱った後の災害の写真だとか、現実のものを載せるとか、そういったものに対する盛り込みが多くある、そこはよいのではないかというふうに思っております。

小林委員長

ほかにいかがでしょうか。

高木委員

先ほどからちょっと「どきどき、わくわく」というのがキーワードで上がってきたかなと思うのですが、教育出版の8ページの「生き物大好き、昆虫調べ」なんていうページを開くと、いきなり怪獣のような大きな顔のバッタの顔が出てきて、その後の展開でも、私は子どものころ、小学生のころ「虫好き明郎」というあだ名があったぐらい、近所で網を持って走り回って、そのころからもう都会化していましたから、カブトムシとかクワガタはとれなかったのですけれども、それなりにアゲハチョウとかシオカラトンボとかとれたのですね。これを見ているとやっぱり男の子はちょっとどきどきしちゃうかなという気がします。

また、渡邊委員からも指摘がありましたように、巻末の「昆虫図鑑」なんかも今の子どもたち、こういうカード的なものは非常に大好きなので、これを見ているだけでもちょっとどきどきしちゃうかなと思います。

また、その後の4年のほうでも、今度「ミニ天体図鑑」というような形で、それぞれの学年のトピックス的なものが、図鑑的なところで興味を引くところがやっぱりちょっといいかなと。東京書籍もいい教科書だと思うのですが、理科好きの育成ということだと、やや教育出版に分があるかなという気がします。

小林委員長

ありがとうございます。理科については、初め各委員からのご意見では、東京書籍、教育出版など幾つか並列してご意見が出てまいりましたが、改めて理科好きであるとか、安全管理であるとか、そういった視点からご協議をいただきましたところ、大方教育出版というご意見が強いようでございますけれども、理科については教育出版でよろしいでしょうか。

それではここでお諮りをいたします。ただいまの協議の結果、理科については教育出版を採択候補とすることでご異議ございませんか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

小林委員長

ご異議ございませんので、理科については教育出版を採択候補とすることに決定いたしました。

では、教科書を入れ替えますので休憩いたします。

午後 7 時 4 4 分休憩

午後 7 時 4 6 分再開

小林委員長

では、再開いたします。

次、生活について協議を行います。各委員から順にご意見を伺いたいと思います。

まず渡邊委員、お願いいたします。

渡邊委員

生活に関しては、社会のかかわりということで、地域のかかわり、家族のかかわりという観点で見ますと、東京書籍と大日本図書、そして新興出版社啓林館が家族のかかわり、社会のかかわりを大切にした内容を多く盛り込んでいます。

安全に関する内容ということに関して、防災・防犯というような形で見えていきますと、東京書籍が多いのですね。それに続くのが新興出版社啓林館、教育出版というような形なのですけれども、東京書籍だけが若干そういったテーマ的に割り振りが偏りがあるかなと。

自然のかかわりについては、ほとんど同じようなページの割き方であって、そんなに大きな差がないなというふうに思っておりました。データのところで見ていくと、そんなところで、そこから内容を見ていきますと、東京書籍がやはり学校の規律の大切さとか、そういったことにまで踏み込んでいる。ちょっと理科の本として考えるならそれはどうなのかということもあるのですけれども。あと「ポケットずかん」がついているのも非常に興味深いなと思いました。

ただ、新興出版社啓林館も 1 年、季節ごとのかかわりだとか、通路の安全だとかって、そういったところにも多く書かれていて、悪くはないと思いました。

それ以外のところについて、ちょっと東京書籍は偏りがあったので、そこを除いて見ていくと、どの教科書も目立ってこれがよかったというのは難しいので、その点を除けば実際にこの中で取り扱う教科書はどれもすぐれているかなというふうには思っております。

小林委員長

では、高木委員、お願いいたします。

高木委員

なかなか生活は難しいですね。導入の部分だけですので、各会社がやっぱり特色を持つ

てつくっていますので、非常に判断が難しいところでございます。

ちょっと気になったところから申し上げますと、まず大日本図書で、冬の生活というところがあるのですが、大家族の写真、しかもこたつがあるという。うちも実はこたつはないのですね。母と住んでいますけれども別世帯で、基本的には親と子どもが中野区の場合は多いと思うので、こういう家庭もあるのだというのを教えるのはいいと思うのですが、やっぱり1、2年生であれば、中野の現在の子どもたちの状況に近いほうがいいのかなと思います。

あと光村図書出版なのですけれども、ちょっとやっぱりイラストが独特で、生活というのはやっぱりちょっとどこの教科書も国語チックになっていて、好みなのですが、ちょっと生活という感じではないのかなと思いました。あと非常に独特のつくりになっていて、構成がちょっとわかりづらいので、1、2年生にはちょっと先生の力量が問われてしまうかなという気がします。

あと日本文教出版もやっぱりイラストが多く入っているのですが、ちょっと私は違和感があるのと、非常に盛りだくさんになってしまっているので、1、2年生には向かないかなというような気がします。

そうしますと東京書籍、学校図書、教育出版、三つの中のどれかがいいのかなと。先ほどの教育出版の、巻末の図鑑を推したということもありますが、東京書籍もこれ「ポケットずかん」がついていて、これが別冊だと低学年、どこかへ行ってしまうと思うのですが、これ、つけても切り離しても使えるということなので、これは非常に子どもたちの興味を引いていい取り組みなのかなと思います。ちょっと絞り切れていないのですが、東京書籍、教育出版、学校図書の三つを私は推したいと思います。

小林委員長

では、大島委員、お願いします。

大島委員

七つもあるのでなかなか見るのが大変だったのですが、まず気がついたところから申し上げますと、光村図書出版は表紙の絵が絵本のような感じで、ウサギとネズミが人間のよように服を着ているという。「生活科」という内容とちょっとかけ離れているということ、それから初めのところの導入の部分のページも、絵本の挿絵のようで動物が出てくるということで、小学校の生活というのと結びつかないということとか、あとその後、「みんなのこにこ大作戦」という単元が出てきまして、「にこにこ」というのが大きなテーマに

なっているようなのですが、「にこにこを見つけよう」とかというテーマで展開するのですが、具体的な生活とのつながりが書いていないので、絵本のような感じがしました。

光村図書出版は全体が絵本のような感じで生活感が少ないのと、あと道具の使い方とか、ごみの分別、安全とかについても記述がありませんでした。

それから新興出版社啓林館なのですけれども、なかなか全体的にはいいとは思いますが、初めの導入部がやっぱりイラストが中心でして、その後もイラストが中心で写真が少ないというのが、子どもたちにとって生活のイメージが湧きにくいのかなと思います。

あと巻末に「わくわくずかん」というのがあって、カードの書き方とか、道具の使い方などいろいろ出ているので、これはいいと思うのですが、全体的にイラストが多いと、それで写真が少ないのでちょっとイメージが持ちにくいと思いました。

日本文教出版も、導入部は絵本のような感じで写真がないのですね。あとは日本文教出版は、全体的に見るとフォントがちょっとばらばらで、色合いがちょっとページによってばらばらだというような見た目のちょっと難点もありました。ただ、日本文教出版でいいところは、家の仕事についてのところで、自分もできるかなという、家の仕事を手伝いましょうということなのですけれども、かなり詳しく出ていまして、お父さんが料理も上手というようなことが書いてあって、お父さんと男の子が台所仕事をしているというのが、そういうのはほかの教科書にはありませんでした。そういう点はいいと思いました。

大日本図書は、初めイラストと写真が導入部で使われていまして、これもちょっと学校生活のイメージという点でいま一つかなということと、秋というテーマで、秋の実を使った工作のページがすごく多いのですけれども、何か実を使った工作もいいのですが、ちょっとバランス的に多過ぎるかなと。季節の変化を感じるという点で、あまり季節の変化というのは扱われていない感じがしました。全体的にちょっと情報量が多いかなと思いました。

それと先ほどの家庭生活のお手伝いのこと、家庭生活のことについては出てくるのですが、お手伝いをしましょうみたいな、お手伝いということは出てこないですね。それはほかでもお手伝いが出てこないという教科書はほかにもありましたけれども、大日本図書の場合はお父さんが外で働いてくれてありがとう、お母さん、ご飯をつくって掃除してくれてありがとうという場面が出てくるのですけれども、ちょっとこれは今の時代、私個人的に合わないかなというふうに思いました。

学校図書は、アサガオに何か特化しているというか、アサガオについてすごく育てたりすることがたくさんページ数が割いてありまして、それはそれで別に悪いことではないと思うのですけれども。

あと学校図書で思ったのは、家にはどんな仕事があるのかなというところなのですけれども、家の仕事ということで1単元設けているのはいいし、お手伝いしましょうというようなことも取り上げているのはいいのですけれども、料理や台所仕事は母親という観念がすごく出ていまして、お母さんが得意なお漬物とかというのが出てくるのですね。食事の準備と食器の片づけは女の子がやっているのです。水やりという外の仕事は男の子がやっているというようなことがあって、ちょっとあまり今の時代、どうなのかなというような感じがしました。

私は教育出版と東京書籍は、それぞれいいなと思って絞り切れていないというところなのですけれども、どちらも導入部はイラストもありますけど写真が結構多く出てきて、特に東京書籍は初めから写真がすごく多くて、学校生活のイメージづくりにはいいかなと思うのです。

家での生活ということについては、どちらも自分のできることとはいう、自立という観点ではちゃんと出ているのですけれども、教育出版も家のお手伝いをしようということあまり書いていないと。東京書籍のほうは、家の生活のことも出ていまして、ごみ出しは何かお父さんがやっているというのと、お母さんが調理しているという場面が全然出てなくて、食器もおじいさんが洗っているという、何かおじいさん、おばあさんが一緒にいて、おばあさんが何か洗濯物を取り入れたりとか、ちょっと先ほど高木委員からお話があった、今、大家族というのは少ないと思うので、おじいさん、おばあさんも一緒にというのはちょっと実態に合わないかなと。お母さんが台所仕事というのは出てこないというような特徴はあるのですが。

いいと思ったのは、教育出版は「ぐんぐんポケット」というのが後ろのほうにありまして、ここで大事なことがいろいろ出てきます。「ぐんぐんポケット」というのを活用していろいろなことができるのではないかなと思ったのと、その中でも表現活動についてすごく力を入れているみたいで、発表しようということに関するページがすごく多くて、新聞づくりだとか発表会をしようとか、手紙を書こうとか、そういう表現活動がすごくたくさん出ているのがいいかなと思いました。

あとフォントも統一されていて見やすいというのものもあるし、春、夏というような四季の  
見つけ方というようなのもありまして、夏は花火とか、川遊びなんていうのもあったりし  
て、季節感が出ていいかなと思いましたがけれども、東京書籍のほうはアサガオのところで、  
種と花、それから双葉とつぼみという、これが一緒に見られるようなページのつくりの工  
夫がしてあるのですね。ですから種が花になったとか、双葉がつぼみになっていくとか、  
それが一緒に比較して見られるようになって、これはすごくいいなと思いましたが、全体  
的に構成に統一感があって、單元ごとに色分けしてあって、左上にタイトルが来るという  
ようなすごく見やすい紙面づくりになっています。タイトルは何か白抜きなのですけど  
も、その背景の色でページ全体を囲うというふうにしていて、すごくきれいなのです  
ね。その辺がやっぱりすごく上手だなというふうに思いました。色使いもきれいですし、  
見た感じがきれいだということ。それから巻末に「べんりてちょう」というのがありまし  
て、教育出版には「ぐんぐんポケット」というのがあるのですけれども、東京書籍には「べ  
んりてちょう」というのがあって、やっぱりこの中で挨拶のこと、安全のこととか、発表  
とか、表現活動なんかについても出てはきます。ただ、比較すると教育出版のほうは表現  
活動にはちょっと力を入れているかなという感じはします。あと東京書籍は巻末に  
「ポケットずかん」というのがあるのですけれども、教育出版のほうは図鑑がないとい  
う点の違いがあります。

そんなわけで、教育出版か東京書籍のどちらかがいいのではないかなとは思いますが、  
どちらにしたらいいかちょっと迷っているところです。

小林委員長

では、田辺教育長、お願いいたします。

田辺教育長

私も結論から申し上げますと、東京書籍か教育出版のどちらかということに絞られてきま  
した。生活は、気づいたことをもとに考えさせて、見つける、比べる、例えるなどの学習  
内容がイメージされているというようなことが大事だと思いますし、そのことが3年生に  
なって理科や社会につながっていくのだろうというふうに思います。事実に基づいて考え  
方をまとめていくというようなことを1、2年で培ってほしいなというふうに思いますと、  
東京書籍と教育出版が非常に子どもたちの、中野区の子どもの生活にかなり、親しみ  
の持てる教科書になるのではないかなというふうな思いもして、写真やイラストもふんだ  
んに使われていて、イメージしやすいというのも共通な点があったというふうに思います。

東京書籍のほうは冒頭に「保護者の皆様へ」というのがありまして、なかなか今の保護者の時代は生活という教科ではなくて、1年生のときから社会と理科だったと思うのですが、これはこの生活というのはこういう目的でつくっているのですよとか、それから学校が楽しくて安全な場所になるということで学校に行きたいという意欲を持たせるために、この生活をつくっているのですよみたいなことが書いてあるのがちょっと親切だし、保護者と一緒に実生活を学んでいくということでは、学校と家庭が連携できるというような視点があるのではないかなというふうに思いました。

3年生になると社会では初めてまちの様子を調べにいこうとか、地域でマップをつくらうという活動になっていくのですけれども、その点でも生活の東京書籍は、下巻の後半で「まちはっけん」という項目を設けて、後半というか、3年生につなげていくというようなことが意図的にあるのではないかなというふうに思いました。

また、「伝えたいこと」という右側の端っこに書いてある「べんりてちょう」ですとか、手を洗おう、うがいをしようとか、それから「やくそく」というのがあって、系統立てて構成されているのではないかなというふうに思いました。

一方、教育出版ですけれども、四季折々の生活というのが意図的に書かれていて、先ほどもちょっと申し上げたのですけれども、中野の場合は自然というのが学校に区内では一番あるということを考えると、1年生というか、上巻のほうで四季の様子が、学校の春の様子、夏の様子、秋、冬の様子みたいに、学校を舞台にイラストが描かれているのでとてもわかりやすいだろうなと思いました。

後半のほうの「まちはっけん」は、実は教育出版は前半に出てくるのですけれども、後半の下巻のほうの四季折々の様子というのが、まちをテーマに春のまち、それから夏のまちという形で出てきますので、秋のまちだったか、同じまちの様子をイラストで、同じまちが秋、春でどういうふうに違ってくるかということが出ておりまして、まちの様子がまた後半でも出てきますので、それはまた3年生につながるのではないかなというふうに思いました。

他の委員の方もおっしゃっていましたが、*「ぐんぐんポケット」*などがとてもよい編集になっていまして、実生活に基づいた写真によって、イメージを持ちやすいということなのですが、どちらを選ぶかというのはとても悩んではいるところです。

小林委員長

ありがとうございます。

それでは最後に私の意見を申し上げます。生活ができた趣旨からすると、いかに今の子どもたちの体験が不足しているかという状況の中で、関心・意欲を高める、いわゆる知識理解に偏ることなく、いわゆる自然に対しても、また、さまざまなことに関して、意欲的に実践していくという、そして社会や理科につなげていくという趣旨を考えたときに、私はこれを全部見たときに、その趣旨にかなっているのは、光村図書出版かなと思いました。要するに子どもの立場からすれば一番イメージしやすいというか、使いやすいものであって、大人が目で見ると一番わかりづらいという部分があるのではないかと思うのですね。

そういう視点で光村図書出版とか、日本文教出版もよくその趣旨を捉えているというふうに思います。

ただ、では中野区でどう採択するかということで、今、委員の方のご意見もいろいろ伺いながら、別の視点からさらに意見を申し上げさせていただきますと、一つはやはり今の子どもたちの体験不足、その他を補い、さらにこれからどういう力をつけていくかということ考えたときに、教科書として子ども本位に立っているのはどちらか、どこかということ、やはり教育出版に分があるのではないかなというふうに思いました。それは例えば先ほど来「ぐんぐんポケット」というのが出てきましたが、私はまず一番最初に着眼したのは、これは下巻ですと110ページでしょうか、本の紹介があるのですね。私は先ほど「保護者へ」という言葉もありますけれども、恐らくそれを読んで保護者がどうというよりも、これがあつたほうがはるかに子どもへも保護者へもインパクトがあるのではないか。今後のさまざまな学びを広げていけると。特に中野は図書館教育に力を入れていますので、そういう点で非常にすぐれた視点かなというふうに思いました。

それからいわゆる振り返るといのが随所に出てくるのですけれども、そういう意味で実際に生活の場合には教科書を使って授業を進めるというよりも、体験して、例えば近くの公園に行くとか、さまざまなことをやって、場合によってはこの教科書で振り返るとか、行く前にちょっとこれを見る、そういう使い勝手という点では、先ほどの理科にも共通しているのですが、東京書籍もすぐれていると私も思うのですが、完成度が高過ぎて、実際問題としてこれを使えるのかという感じを持ってしまうのですね。

そういう意味では光村図書出版とか、日本文教出版のほうが私は生活の趣旨としてはかなっているかなと思うのですね。ただ、トータルすると例えば写真、私は実は非常にイン

パクト、いろいろ見て感じたのは、教育出版の上巻の 57 ページのこういう花火の写真であるとか、1 枚で出している、こういうインパクトのあるもの、例えば夏休みで川面からアングルで撮っているものとか、まさに先ほども他の委員からもご発言がありましたが、季節感が非常にうまく出ているもので、どちらかというとは私は本来的な趣旨もかなった部分が入っているので、私はやはり教育出版かなというふうに感じました。

私からの意見は以上であります。

それでは、さらにご発言をいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

田辺教育長

今、委員長が子どもの視点というお話をされましたけれども、やはり 1 年生、2 年生って、まだまだそういう意味ではきちんと子どもの世界の中で想像力をたくましくして、実生活に結びついていくというような学びも必要だというふうに思います。1 年生の生活の上巻の 45 ページなどでも、イメージを膨らませるような楽しい仕掛けもできていたりまして、子どもの視点が反映している教科書だなというふうに今、委員長のお話を伺って思いました。

それでなおかつ先ほどもちょっと言いかけたのですけれども、四季折々はすごくはっきりしている教科書で、この辺は日本人として日本に住んでいるということを確認できるような、そういうことを小さいときから学んでもらいたいという思いもありますので、甲乙つけがたいというお話もさせていただきましたが、教育出版を候補に挙げさせていただきたいというふうに思います。

小林委員長

ほかにご意見いかがでしょうか。

渡邊委員

各委員からのいろいろな観点を伺いまして、そういう観点でもう一度見ると、教育出版の図書の案内をしているということと、手紙の書き方や発表の仕方、電話のかけ方とか、記録の仕方とか、人の聞き方とか、そういったものの盛り込みが多くて、それは実際、この理科、社会の授業にどうつながるのかということなのですからけれども、やはり非常に大切なことが盛り込まれているなど。それが盛り込まれているのは、教育出版が多く取り上げられている。ページというか、タイトルをとってまでつくっているというところはいいのではないかというふうに思っております。

小林委員長

ほかによろしいでしょうか。

高木委員

生活の單元の中で、「まちたんけん」というのがかなり大きなウエートを占めているかなと私のほうは思っております。それを見ますと、東京書籍のほうは、例えば、「大きなザリガニのいる池を知っています。」、「いつからいるのかな。」とか、あとビニールハウスで、「中には何があるのかな。」、ビニールハウスはちょっとあまりないかなとか、「おいしそうなトマトがいっぱいできているよ。」、ちょっと見当たらないなど。あと私どもの短大も近隣の小学校のまち探検で例年、毎年緑野小と江古田小から来るのですが、引率は保護者の方がサポーターで来るのがほとんどなのですね。そうすると先生がレクチャーされるのでしょうけれども、多分保護者の方は自分の子どもの教科書を見て、まち探検のイメージを持つのかな。そうすると教育出版の「まちたんけん」のつくりのほうで、どういうところがポイントで、こういうことを子どもたちに気づかせるのだよというのがわかりやすくなっていますので、私としては本当に甲乙つけがたいのですが、教育出版のほう若干分があるかなと思います。

小林委員長

今、幾つかご意見をいただきましたが、全体をまとめてみると教育出版というご意見が強いようですが、生活については教育出版ということによろしいでしょうか。

それでは、ここでお諮りいたします。ただいまの協議の結果、生活については教育出版を採択候補とすることでご異議ございませんか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

小林委員長

ご異議ございませんので、生活については教育出版を採択候補とすることに決定いたしました。

教科書を入れ替えますので、休憩いたします。

午後 8 時 2 3 分休憩

午後 8 時 2 5 分再開

小林委員長

それでは再開をいたします。

次に音楽について、協議を行います。各委員から順にご意見を伺いたいと思います。

まず高木委員、お願いいたします。

高木委員

音楽は2者でございます。私は小学校のころ大変音楽が苦手だったので、ここで教科書採択にかかわるには本当に微妙な心持ちがしております。

やはり音楽が好きな子は好きなのですけれども、苦手の子は苦手意識を持ってしまうので、そういうのを払拭できるような教科書がいいなと個人的には思っております。ただ、この教育出版、教育芸術社、両方とも内容的には本当に甲乙つけがたくて、音楽が専門ではないのですが、よくできているかなと思います。

本区の状況を考えますと、なかなか専科の先生が高学年以外は置きづらいという状況があります。特に低学年はほぼほぼクラス担任がやっていますので、そうするとできるだけ若手の先生でも教えられるような展開の教科書のほうが本区には向いているのかなと思います。

小林委員長

それでは大島委員、お願いします。

大島委員

大体内容的には共通なところが多いのですけれども、ざっと見ていきますと楽器の紹介は両方の教科書ともあります。例えば教育芸術社は1年がハーモニカとか鍵盤、2年がオルガン、太鼓、木琴、3年が金管、4年が木管、5年が弦楽器、6年で日本の楽器とあるのですね。

教育出版のほうは、1年が打楽器、2年が鍵盤楽器、3年が木管、バイオリンなど、4年が金管、5年がいろいろなアンサンブル、吹奏楽とか、6年が日本の楽器と、ほぼ共通しているのですけれども。

教育芸術社のほうの3年と4年の木管と金管楽器のところ、音の出る仕組みというか、音の出る部分のマウスの部分というのでしょうか、息を入れる部分の写真が大写しになっていまして、大写しで説明されているのは普通あまり見ることができないところですし、興味を引いていいなと思いました。

それから、6年でオーケストラの写真とかが両方とも出ているのですけれども、教育出版のほうはオーケストラの紹介のときに、楽譜の例なんかも出ているのですけれども、楽器はイラストの紹介のみなのです。楽譜はちょっと見ても難しいと思います。教育芸術

社のほうは、オーケストラの主な楽器が並び順が出ているのと、各楽器が演奏者が持っているという写真が出ているのでいいなと思いました。

リコーダーの運指表、指の運びの表については、教育出版のほうが大きく出ていていいのですけれども、ただ、折り込みの中にあるというので、ちょっと使いづらいのではないかなと思いました。

音符とか記号の説明なんかも教育出版は大きく出ていていいのですけれども、やっぱり折り込みになっているので、ちょっと使いづらいかなと思います。音符の説明などは教育芸術社のほうは、やや小さ目ではあるので、そこがちょっと残念だなとは思いますが、あと比べたのが目次のところで、教育出版のほうは、「すてきな声で」とか「リズムと仲よし」とかという単元のタイトルになっていて、タイトルがそんなふうにはばらばらなので狙いがちょっとわかりにくい。

教育芸術社のほうは、「何々を味わおう」とか「何々を表現しよう」、「響きを味わおう」とか、何とかしようというふうな、みんなそういう言い方に統一されていて、狙いははっきりしているのですね。例えば「豊かな歌声を響かせよう」とか、そうすると、合唱か何かやるのかなというような感じで、やることの狙いははっきりしているのはいいと思いましたのと、それから教育芸術社について言いますと、マークなのですけれども、目次のページのところでレコードのマークで鑑賞と、それから虹の絵のマークで音や音楽をつくる学習と、この二つだけが示されていて、いろいろな単元の中の曲やなんかの紹介のところにもその二つがついているということで、二つに絞ってあるのです。これがすごくわかりやすくて。

教育出版のほうは、そのマークが七つあるのですね。目印になるマークが七つ右下に囲んであるのですけれども、目次のところに出てくるのはそのうち三つだけで、あとは中身の内容のほうに出てくるらしいのですけれども、どこにあるのかがよくわからないので、ちょっとこのマークの使い方も難しいなと。

それから教育出版のほうは目次が二つあるみたいな形になっていて、上と下で。下の欄にもいろいろなタイトルがあって、上の目次と下の目次が何か二つあるみたいなふうなつくりになっているのが、ちょっと使いづらいのではないかなと思います。

教育芸術社のほうは、目次もそういう意味で非常にわかりやすいですし、目次の下のほうに内容についての紹介欄も少しあるのですけれども、「日本の歌」とか、「みんなで楽

しく」とかという、この二つのコーナーだけになっていますので、そんなに混乱することもなく、わかりやすいと思います。

あと教育出版については、6年のところで「カントリーロード」という曲が出てくるのですけれども、これが英語の歌詞のみなのですね。小学校6年生で英語活動も多少やっているとはいえ、英語の歌詞で歌うということなのか。それからガーシュインの「ラブソディー・イン・ブルー」がジャズとクラシックの出会いというふうで紹介されているのですけれども、「ラブソディー・イン・ブルー」は確かにジャズとクラシックの融合したすばらしい名曲なのですが、非常に音楽界の中でも特異な分野でして、ほかにあまりないのですね。小学校ではちょっとそういう意味でも難しいかなというふうに思いました。

以上です。

小林委員長

では渡邊委員、お願いします。

渡邊委員

流れとして見ていくときに、音楽がどういうものを使っていく、例えばリコーダーを使うとか、ハーモニカを使うという使い方に関して、この表紙がどっちが使いやすいかなという観点は、実際に自分の中には、甲乙はちょっとつけがたい。そして、国語の教科書でどういう文が使われているかということで、今、大島委員が言われたように、どういう曲が意図的に盛り込まれているのかというところがある。

ただ、そういう形で見てみると、ジャズとかではなくて、日本の歌というもので見ると、同じように盛り込まれているのは確かかなというふうには思います。

ただ、少し違ったのは、「君が代」が両方とも掲載されてあったのですけれども、教育出版は「君が代」についての歌の説明書きがついている。

それと教科書のつくり方の形では折り込みだとか、フィルムを使ったり、これについても賛否両論だろうと思います。確かに折り込みがいいのかどうかということに関しては、使いやすいのかどうかというと、ちょっと授業の内容でわかりにくい。それで写真のきれいさという教育出版のほうが若干きれいなのですね。

ですからこの辺については、どの部分をとってもちょっと甲乙つけがたいと思います。

小林委員長

では田辺教育長、お願いします。

田辺教育長

2者ですので、委員の皆さんがいろいろ分析をしていただいているので、私はあまり重複しないようにと思っているのですけれども、教育出版のほうはいろいろ内容が盛り込まれていて、音楽を使って自分の生活を豊かにしていくというような観点からすると、可能性がどんどん広がっていくなというような第一印象を持ちました。

それから中野区の音楽の状況を見てみると、例えば連合音楽会ですとか、それから音楽鑑賞教室などで小学校も中学校もオーケストラを生で聞くというような機会もありまして、そういう意味でいうと割と芸術としての音楽を受け入れる素地があるのではないかなというふうに思っていますので、教育出版の教科書は、子どもたちにとってはきちんとついていける、十分学習ができていけるのではないかなというふうに思っています。

それから教育出版のほうでは、6年生の教科書で辻井伸行さんを冒頭に持ってきて、割と子どもたちが親しめる世代でもありますし、その人が音楽を通じて自分はどういう思いを持っているかというようなことを書いたメッセージもありますので、割と私としては教育出版の教科書って可能性がどんどん広がっていいなというふうに思っています。委員の方からもお話がありますように、中野区の教員の現状を見ても、低学年とか1、2年生は学級担任が教えるというようなことですか、教員が教えやすい教科書ということでは教育芸術社の教科書なのかなとも思います。

小林委員長

最後に私の意見を申し上げます。2者しかないということで、二者択一みたいな形なのですが、私はやはりこの教育出版の芸術性というのでしょうか、これを中野区の子どもたちに提供したいなという思いです。

まず指導のしやすさという点に関しては、この二つの教科書の差から、ではいわゆるこちらの教育芸術社をとったから区内の音楽の指導がスムーズにいくかということ、そのメリットよりもはるかに芸術性の高いものを子どもに提供してあげるほうが、やはり教育委員会の使命としては私は大きいかなと。

私は幾つか思うのは、きちんと全部アーティストの名前を載せているわけですね。教育芸術社の場合にはほとんど誰かわからない、いわゆる中のアーティストが。そういう点では、例えばビジュアル的な面でも、それから出てくるアーティストの名前、古今東西の部分というか、小澤征爾さんも出ていたりとか、私は先々子どもたちに提供するものとして

は、やっぱり芸術科ですから、音楽というのは。ですからその教科の特性を考えたときに、やはり私は教育委員としては捨てがたいものがある、ぜひ提供したいなど。

先ほど来いろいろ譜面だとか、英語のこととか出てきましたが、私はある意味では生涯学習の扉を開くという視点からも、こういうようなものを出して、そして音楽鑑賞教室でも本物に触れさせるとか、そういうリンク性もあると思います。

ですから教員の指導そのものは、教育出版でも心配はないと思います。あるとすれば使いなれているかどうかという部分で払拭できると思いますので、私としてはあらゆる面からすぐれているかなという、そういう結論に達しています。

以上です。

それではほかに委員からもう少ししぼり込んだ形でのご意見はございますでしょうか。

大島委員

どちらの教科書も大変すばらしいと思いますし、どちらで悪いということは全然ないと思います。目次などで教育芸術社に使いやすい点はあるかもしれないのですが、教育出版のほうも非常にいい点があると思います。

一つは、いろいろな資料とか写真、オーケストラの大きな写真が中に挟んでというのもそうなのですが、いろいろな楽器の写真にしても中で大きく出ていますし、全体に見てきれいなのですね。いろいろな写真が出ていまして、音楽とは直接関係がないのもあるかもしれませんが、フィンランド地方の写真とか。でも見ているとすごく楽しいと、写真も含めて楽しいと思います。

それともう一つ、5年生のところの11ページに、「おなかから声を出そう」というページがありまして、要するに歌うときにはおなかから腹式で声を出しなさいということで、その練習の仕方もイラスト入りで出ているのですね。おなかから「はっと出しましょう」みたいな。こういうのがあると先生もすごくこれを見ながら、「歌うときにはおなかから、やってみましょう」と指導しやすいと思うので、大変歌うことの指導に役立つのではないかと思います。ということで、教育出版もいい点があるなというふうに思ったところです。

渡邊委員

音楽は芸術でということで、指導室長にもう一度確認させていただきたいのですけれども、音楽は原則的には中野区の小学校では専科の先生がやられることがほとんど主、特に高学年についてはやられているというふうに考えてよろしいのでしょうか。

指導室長

高学年、5、6年生はほぼ専科の教員が教えています。これは学級数との関係がありますので、学級数が少ない学校においては1年生から専科が教えるということはありませんが、なかなかそういう学校ばかりではありませんので、おおむね4年生以上は専科の教員が教えているというふうに理解しています。

渡邊委員

ありがとうございました。芸術ということで、私もなかのZEROで行われるオーケストラに行かせていただきまして、非常に子どもたちにとって音楽とか芸術というものに触れる機会ということは、中野区としては重要として捉えている。そういう意味で、芸術という形でいうとコンサートホールの写真を全面に写し出したりとか、「何千人第九」という有名な「第九」の写真を折り込みの中心にばんと置いたりとか、音楽、それとまたピアノとかを昔の写真、今の現代のピアノとの比較の写真が出ていたりとか、そうしてまた今、活躍している日本の音楽家を表紙に持ってきて紹介しているとか、そういうことを見るとやはり音楽をただ授業として習うというのではなくて、音楽は一つの芸術だということを認識していくという、そういう形であればいろいろと教科書の枠を超えているような、いろいろと工夫をされた教育出版の教科書を使うのは非常に興味深い、中野区の特徴のある教育につながる可能性はあるなというふうには感じております。

小林委員長

ほかにいかがですか。

田辺教育長

先ほど若手教員が教えやすいというお話もさせていただいたのですが、教育出版のほうで、1年生の教科書で鍵盤ハーモニカの学習のところがあるのですが、このところでいうと教育出版のほうがとても丁寧にスモールステップで学習ができるようになっていて、そういう教員にとって教えやすい教科書という意味では、きちんと配慮はされているなというふうに思いました。

また、巻末に各学年に2ページというか、見開きで「君が代」の国歌の学習がありますけれども、「君が代」の意味とか、「さざれ石」の意味を小学校1年生から各学年ごとに発達段階に応じて内容を徐々に詳しくしながら学習できるようになっているというところも評価できる点ではないかと思えます。

小林委員長

ほかにいかがでしょうか。

高木委員

1年生の教科書を見ますと、教育出版のほうは音符がしっかり載っているかなという気がします。逆にいうと教育芸術社のほうは、親しみやすいというか、音楽苦手な子どもは入りやすいかなという気はするのですが、それほど決定的な二つの教科書に私は差がないと思いますので、全体として意見の強いもので異論はございません。

小林委員長

私も生涯学習の窓口というか、芸術、音楽と捉えたときに、中野区の子どもたちに提供するのどちらがいいかという視点からすると、教育出版のほうがふさわしいかなというふうな思いを持っております。

それでは全体的には教育出版ということで大体意見が集約できたと思いますので、音楽については教育出版ということでよろしいでしょうか。

それでは、ここでお諮りいたします。ただいまの協議の結果、「音楽」については教育出版を採択候補とすることでご異議ございませんか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

小林委員長

ご異議ございませんので、「音楽」については教育出版を採択候補とすることに決定いたしました。

それでは、本日の協議はこれまでにしたいと思います。

以上で、本日の日程は全て終了いたしました。

これをもちまして、教育委員会第4回臨時会を閉じます。

午後9時03分閉会